

公益社団法人 日本技術士会 男女共同参画推進委員会
D & I 学習会 開催報告

1. 開催概要

- ・日時：2018年11月30日（金）19:00～21:00
- ・場所：機械振興会館 211 会議室
- ・参加者：18人（うち男女共同参画推進委員会 11人）※講師含む
- ・プログラム：

- (1) 開会
- (2) 講演「多様性を活かすマネジメント～世界から見た日本～」
講師 原田 敬美氏
株式会社 SEC 設計事務所 代表
元 港区区長
- (3) グループ・ディスカッションによる振り返り
- (4) グループ毎の振り返り発表と質疑応答
- (5) 閉会



2. 内容

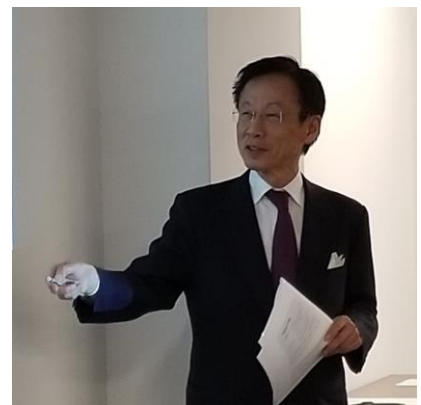
(1) 開会

石田委員長から D&M (ダイバーシティ&マネジメント) について、男女共同参画推進委員の原田氏の経験より知見を得て、今後の活動に生かす旨の開催趣旨の挨拶を行った。



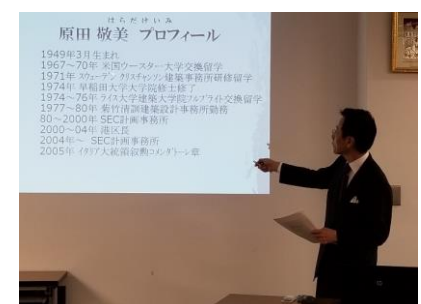
(2) 多様性を活かすマネジメント～世界から見た日本～

原田 敬美氏が、3回の留学・その後の国際的活動・港区長としての経験を踏まえ、世界の状況と日本の現状を対比しつつ、D&Mのあり方について講演した。



<講演内容>

- ・ ウースター大学留学（米・オハイオ州）
1969/70年に人口2万の小さな町の全寮制の大学に留学し、大学で男女比が半々であることに驚いた。また、戦後の傷跡も身近に感じられる時代、留学生である自分に、女子学生から食堂で親切な声掛けをされたことが印象的であった。
- ・ カールクリスチャン建築事務所（スウェーデン・ストックホルム）
1971年当時、ストックホルム工科大学では、女子学生の比率が6割であった。また、日常生活にあっても地下鉄やバスの運転手も女性の割合が高く、深夜のパトロールでも女性の警察官が巡回するなど、男女の権利・義務が同等でもあった。同時期、大阪万博にコンパニオンとして来日したスウェーデ



ン女性が、日本でのコンパニオン向けの女性寮で門限があることに驚いていたことなどからも意識の違いが感じられる。

- ・ ライス大学建築大学院 (米・ヒューストン)
1974/70年に留学した当時、宇宙飛行士の半数の出身校がこのライス大学でありノーベル賞受賞の教授も在籍していた。ここでも学生の半数は女性であり、教授などの公募にあって女性を積極的に採用する姿勢があった。



- ・ 女性の意識の変化
米国では 1920 年代にやっと女性に参政権が与えられ、この当時の先生は結婚したら教職を退職する、大学によっては男女がダンスをしてはいけないなどの決まりがあった。近代オリンピックですら、開始当時は女性参加を拒む社会風潮となっていた。しかし、その後 1960 年代後半からは急速に男女同権の意識が高まってきた。



また、近年にあっては、男女平等のみならず、トランスジェンダーや同性カップルなども容認させるようになってきた。

これらの状況と日本を比較すると、日本は、1970 年代も、女性の役割は閉鎖的であり男性の補佐という立場は拭えなかった。当時の新聞記事の切り抜きによると、女子高校生の 7 割が将来専業主婦になることを望んでいるというアンケート結果もあった。この意識は、まだ変わっていないのではないだろうか。

- ・ 建築関連の国際会議では、ハンガリー、トルコ、ブルガリアなどでも女性の参加者が多いだけでなく、リーダも女性が多かった。ハンガリーでは、後援者の女性の弁護士事務所で開催し、トルコでは女性の大学学長の挨拶もあった。OECD の統計とは、イメージが異なるかもしれないが、実際に交流すると要職を持つ女性が多く感じられた。また、女性が多いというだけでなく、女性の自己主張がしっかりできているという点で日本と意識が異なると感じた。

- ・ 日本の現状を振り返ると意識の問題が大きいと感じている。1970 年頃、女性も働くべきとの意見に対し、奇異な目でみられることも多かった。また、職場のオフィスレイアウトという視点でみると、この当時、すでに海外では、オフィスランドスケープという、やっと日本では昨今の働き方改革でも注目されているフリーアドレススタイルが主流であった。日本企業の多くは、きれいな食堂に改修しても、男女が分かれたグループで座っていることが多いことに驚かされる。ソフト・ハードともに日本は、かなり遅れているのではないのだろうか。



- ・ 女性の意識だけではなく、芸術への尊厳の意識が日本では薄い。港区長を務めた時には、子育て支援と合わせて芸術への後援にも力を入れていた。大学の教授の専攻のみならず、芸術の分野でも、日本は、世襲的な風習が強いと感じている。もっと、門戸を広げることで、自由競争が生まれる。

(3) グループ・ディスカッションと振り返り

飯島小委員長のファシリテートで、グループに分かれ、「印象に残ったこと」、「原田氏に聞きたいこと」「自分がこれからしようと思うこと」について、付箋に書き出し、貼り付けてグルーピングを行うなどのワークを行った。



(4) グループディスカッションの発表と質疑応答

- ・ 各グループとも、原田氏のまず自分から行動するという姿勢と 1960 年代からの資料の蓄積を行っていたことへの印象が強く残った。
- ・ どうしたら、日本の女性も自律して活躍するための積極性が身に付けられるのかという質問では、原田氏自身も人前で話すのは苦手だったものの大阪出身の奥様の積極性に学び、努力を重ねるうちに上手に自己主張できるようになりましたという回答がほほえましく、含蓄が深かった。
- ・ また、欧米諸国においてなぜ 1960 年代にかけ、急激に男女平等が進んだかという質問に対し、これらの国では、移民などの人種問題もあり避けて通れない社会問題があったという背景について説明いただいた。



質疑応答からも、これからの女性の活躍には、理工系の女子学生を増やすことが重要であることが再確認され、男女共同参画推進委員会の女子学生・女性技術者支援の小委員会活動へのエールともなった。

(5) 閉会

当委員会担当の林雅弘理事からも、原田講師へのパワフルな講演への感謝と、まずは自分で行動を始めたいとの言葉で閉会となった。



以上